

## 防衛セミナー議事録

- 1 日 時：平成25年3月9日（土）14：00～15：00
- 2 場 所：宮城県加美郡色麻町「農業伝習館」
- 3 講師等：在日米国大使館 政治部 安全保障政策課長  
          デイビッド・アレン・シュレイファー氏  
          （通訳）在日米国大使館 政治部 安全保障政策課 補佐官 森 邦恵氏
- 4 要 旨：次のとおり

### 【 開会の辞 】

（司会）

それでは、定刻となりましたので、ただ今から、防衛セミナーを開催させていただきます。

本日はお忙しい中、東北防衛局主催の防衛セミナー「絆 トモダチ作戦と日米同盟」にご出席していただきまして、誠にありがとうございます。

私は、本日の司会を務めさせていただきます東北防衛局地方調整課の浅野と申します。

最後まで、お付き合いのほど、どうぞよろしくお願いいたします。

皆様方には、ご入場の際にお渡ししました「アンケート用紙」について、改めてご案内申し上げますが、この用紙に後ほどご記入願います。

このアンケート用紙は、セミナー終了後に回収をさせていただきたいと考えておりますので、皆様方のご協力をよろしくお願いいたします。

それでは、本日のセミナーの開催にあたり、主催者であります東北防衛局長・中村吉利から挨拶させていただきます。

### 【 主催者挨拶 】

（局長）

皆さん、こんにちは。

東北防衛局の中村でございます。主催者を代表しまして一言ご挨拶を申し上げます。

まずは、皆様方におかれましては、土曜日、さらに今日は中学校の卒業式もあると聞いております。そのようなご多忙の日にお集まりいただきまして、改めて感謝を申し上げる次第です。

また、先日終了いたしました王城寺原演習場でのアメリカ海兵隊による実弾射撃訓練でございますが、こちらにつきましては色麻町の皆様に変なご迷惑をお掛けしたかと思っております。お陰様をもちまして無事終了しまして、海兵隊も先般帰還したところで

ございます。改めて感謝申し上げたいと思います。ありがとうございました。

本日は防衛セミナーを開催させていただいております。この防衛セミナーは、私も東北防衛局が、安全保障ですとか、防衛の問題につきまして、多くの方々にご理解をいただくために開催をしているものでございまして、色麻町では初めての開催となります。

本日は、テーマを「絆 トモダチ作戦と日米同盟」といたしまして、在日米国大使館政治部安全保障政策課長・ディビッド・アレン・シュレイファーさんから、東日本大震災におけます米軍による通称トモダチ作戦と、日本の安全保障の要であります日米同盟に関する講演をお願いしているところでございます。

ここで、本日の講師でありますシュレイファーさんをご紹介いたします。

シュレイファーさんは、アメリカのベイラー大学及びテキサス大学オースティン校におきまして、政治学及び国際関係論の学位を取得され、1994年に国務省に入省する以前は、香港バプティスト大学で政治学の講義を受け持ち、また、「Hong Kong Transitions Project」の一員としまして、香港中文大学が出版した「一国二制度」の編纂にも貢献をされたとうかがっております。アメリカの国務省では、情報調査局及び東アジア大洋州局に勤務され、在外では香港、ブラジル、メキシコ、フィンランド、イラクへの赴任経験があるとうかがっております。2009年には、イラクにおきまして軍民合同地方復興チームの政策顧問を務められ、アメリカ多国籍軍司令官から民間人業績司令官勲章を授与されるなどの活躍をされ、2012年7月から現在の職に就かれていると聞いております。

なお、ご本人は、日本に関しまして、すべてのものに興味があるというようにうかがっておりますが、その一方で、フィンランドの歴史ですとか、民間伝承にご熱心で、フィンランドの神話ですとか、言語に関する論文を発表するほど聞き及んでおります。

本日はこういったシュレイファーさんのご講演を通じまして、日本と米国の関係についてのご認識が深まり、ひいては日本の防衛に対するご理解ご支援が深まりますことをご祈念申し上げましてご挨拶とさせていただきます。

本日はどうもありがとうございます。

## 【 来賓挨拶 】

(司会)

続きまして、本日の開催地であります、色麻町長・伊藤拓也様からご挨拶を賜りたいと存じます。よろしく願いいたします。

(伊藤町長)

皆さん、こんにちは。町長の伊藤でございます。

今、東北防衛局の中村局長からお話がありましたとおりでございます。我々の取り巻く環境、最近、大分きな臭くなってまいりました。特に尖閣なり、北朝鮮なり、竹島というようないろいろな問題があるようでございます。

一昨年、東日本大震災が起りまして、まもなく明後日で丸2年という日を迎えるわけですが、その東日本大震災の時に、米軍がトモダチ作戦ということで、いち早く仙台空港の開港に大変な尽力をしていただいたということは、皆さんも記憶にまだ新しいことだろうというふうに思います。そうした中において、やはり日本とアメリカのトモダチ作戦といえますか、同盟というのは、大変、冒頭に申し上げた中では重要なことだと思いますし、本町も今局長がおっしゃった沖縄海兵隊の演習ということで、我々も日本国の防衛を担っているんだという意気込みの中で演習場を利用させていただき、そのお陰を持ちましてSACO予算というものを頂戴しております。これも少しずつ減らされるようですが、できるだけ減らさないようお願いしたいということで、一昨年ですか大分頑張ったのですけれども、1億800万を頂戴して、これが我々の民生安定にも寄与しているということでもあります。そういう点では東北防衛局と色麻町と、そしてまた米軍が一体となりながら、我が国の防衛をしっかりと担う、安心安全な国土作り、国土の防衛に当たっていただければ幸いです。

今日はディビッド・シュレイファーさんに講演をいただいて、日米同盟の意義なり、有意義さというものを改めて感じられれば大変ありがたいと思います。どうぞ最後までお聞きいただきますように心からお願いを申し上げて、措辞になりますがご挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。

(司会)

ありがとうございました。

## 【 講演 】

(司会)

それでは、皆様、お待たせいたしました。

早速、本日の講師であります、在日米国大使館政治部安全保障政策課長・ディビッド・アレン・シュレイファーさんの講演に入らせていただきます。

なお、本日の講演は、通訳を介して進めさせていただきます。

本日の通訳を担当しますのは、在日米国大使館政治部安全保障政策課の森補佐官です。

それでは、よろしく申し上げます。

(シュレイファー氏)

中村さん、伊藤さん、皆様、ありがとうございました。忙しいところですが、ありがとうございました。始める前に、私はディビッド・シュレイファーです。

今日、初めて東北地方に来ました。いい経験です。いい所です。とても快適です。それだけでなく、最近、米軍はこの地域の中で特別な訓練を行いました。このスペシャルトレーニングはとても大切ですが、でも、ちょっと不便です。

(以下通訳の発言)

米海兵隊の演習によりまして地元の皆様にはご不便をお掛けしたと思います。兵士たちに自衛隊の皆さんと一緒に訓練する機会をいただきまして感謝申し上げます。

本日は、日米同盟と在日米軍、そしてその兵力構成と、この地域にとって非常に重要であったと思いますトモダチ作戦についてお話させていただきます。

写真にご覧いただけますのは、約2週間前にワシントンで開催されましたサミットの際のオバマ大統領と安倍首相です。このサミットは成功でした。と言いますのは、双方のリーダーが日米同盟の重要性について強調したからです。

始めに歴史的な背景からお話させていただきます。

こちらの写真は1960年、当時のアイゼンハワー大統領と岸首相が日米安全保障条約に署名している写真です。

私自身、アジアの特に日本の歴史に関しまして関心があって、これまで勉強してまいりました。

日米の間の協定、そして防衛に関しまして、素晴らしい点の1つに、第二次世界大戦の際には日本とアメリカは非常に厳しい戦いをしたのですけれども、それを乗り越えて、今こういった力強い関係にあるということです。何十万人という米兵が太平洋での戦争で命を落としました。

日本では何百万人という人々が長崎などの爆弾によって負傷し、また、命を落としました。そして、こういった厳しい歴史を乗り越えて今や同盟関係にあり、世界で最も力強い同盟関係を築いてきました。それは大変素晴らしいことです。世界の歴史の中でこのようなことができた国は、本当にこの二国しかないと思います。

外交官として私がいつも心がけているのは、この関係をより力強くしていくためにできることは何でもやろうということです。

こちらの写真は、その特別な関係を示しています。

過去20年、25年間にサミットが開催され、大統領と日本の首相との間で数々の問題について話し合われましたけれども、特にこの友好的なパートナーの関係を強化するということは重点が置かれてきました。

次に、日米安全保障条約についてお話いたします。日米それぞれの責任がここに述べられています。

まず、いくつかの条項についてご紹介したいと思います。第5条と第6条です。

こちらは特別な条項になっておりまして、アメリカ合衆国は日本に何か起こった場合には、どんなことがあっても駆け付けて守るという義務が課されています。一方で

日本にはそれが課されていないという非常に異なった種類の条約です。

そして、これが日本国憲法で、平和憲法とも呼ばれていますけれども、その第9条がこちらに示されております。

歴史的に見て、こういった憲法はありません。

そして、この第9条には、「日本国民は・・・国権の発動たる戦争と武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。」と定められており、皆さんこのように学校で学ばれたと思います。

しかしながら、こちらの条項というものは書かれてから日が経っており、現在の国際状況というものも大分変化してまいりましたので、それに合ったものとは言い難くなってきました。そして、安倍総理は明確にこのように述べられました。この第9条の憲法解釈について再検討する必要があると。再検討することによって自衛隊はより違った形で国際貢献ができるようになりますし、また、共通の敵、例えば北朝鮮に対して、アメリカと行動する機会がより増えるということです。非常にこれは重要な議論だと思うのですが、アメリカの外交官として考えておりますのは、米国としてはやはり日本にはもっと国際協力をしてほしいと望んでおります。イギリスやドイツといった先進国のように国際社会に貢献してほしいというふうに希望しています。

これはあくまで日本人々、日本の政府が決めることなのですが、その決断がどのようなものであれ、アメリカは日本に対するコミットメントは変わらず、何か危機があった際にはいつでも側にいるということは変わっておりません。

こちらのスライドは日米同盟に対する日本国民の支持率を示しております。セルフ調査による結果なのですが、2011年1月の数値が一番最近のもので、やや古い数値ではあるのですが、およそ80%の日本国民の皆様が日米同盟を支持しているということです。私はこれについて非常に誇りに思っております。これによって米軍が皆さんの信頼を得ているということが何かの形で示されればと思います。

こちらの写真もいい写真だと思うのですが、パネッタ元国防長官と森本元防衛大臣の写真です。

私自身、こちらの会談に参加したのですが、非常に良い会談ができて、日米同盟について再確認する良い機会になりました。

アメリカでも新しい政権が誕生し、日本でも新しい政権が誕生しましたが、アメリカでは新しい国務長官にケリー長官が就任しまして、また国防長官にはヘーゲル長官が就任いたしました。この2人は近いうちに東京にやってくる新たな関係を築くことになると思います。

これまで日米同盟についてご説明してまいりましたが、ここからは在日米軍の兵力構成についてお話しします。

こちらは兵力構成の概略なのですが、基本的な数字というものは若干は変わ

ってくることはあるのですけれども、日本に駐留している米軍の兵士全員と国防総省の軍属、また軍人の家族など含めると全部で10万人ほどおります。

陸上に配備されている兵士の合計は3万8千人超で、海上に配備されている兵士はおよそ1万1千人ですので、トータルで大体5万人近くになりますので、大変多くの要員が日本にいるということです。

皆様にこちらを見ていただきたいのですが、日本人従業員の数はおよそ2万5千人おまして、基地内、基地外でフルタイムで働いている人々の数になります。

海兵隊の数は1万9千人いるのですけれども、実際アフガニスタンに派遣されたりしているものもおりますので、日本人従業員の数の方が多いということは注目に値すると思います。

次に軍種毎に見ていきたいと思います。在日米空軍は日本で最も大きな規模を誇る軍です。F-22も日本で飛んでおります。在日米空軍は、沖縄の嘉手納と横田基地、青森県にあります三沢基地に配備されております。

日本にいる米空軍は日本を防衛するために制空、反撃、情報収集といった能力を有しています。

そして次は在日米海軍に関してですけれども、こちらの写真にありますのは空母ジョージ・ワシントン、非常に大きな船です。ジョージ・ワシントン有しております第7艦隊は、アメリカが有しております艦隊の中でも大きな艦隊の中の1つで、横須賀にベースを持っております。そして、佐世保に関しても触れておかなければなりません。佐世保にも軍の艦船が配備されております。

こちらが在日米陸軍です。

陸軍の兵士というものは実際に日本にはあまり数はおりません。大部分のアジアにいる米陸軍は韓国に配備されております。北朝鮮との境界線のところで北朝鮮が何かしたときに備えて配備されております。在日米陸軍の規模は非常に小さいのですけれども、彼らがやっていることというものは非常に重要です。写真にございますのは、弾道ミサイル防衛のためのミサイルです。こちらの発射台から発射されるミサイルで、北朝鮮から仮にミサイルが発射された場合には、それを打ち落とすということになるので、本州にミサイルが到達する前に、もしくは日本の艦船を攻撃する前に、北朝鮮からのミサイルを打ち落とすためのものです。

青森にXバンドレーダーのシステムが配備されていますけれども、こういったレーダーは北朝鮮からミサイルが発射された際にそれを追跡するためのものです。本当に数にしますと2、3千人しかいないのですけれども、非常に重要な任務を担っています。

つい最近まで特別な演習のためにこちらにも来ていたと思いますけれども、在日米海兵隊については皆さんもご存じだと思います。

よく日本人の方に聞かれるのですけれども、どうして沖縄の海兵隊は沖縄でなければいけないのか、なぜみんなグアムに移転することはできないのか、又はほんの少しだけ沖縄に残すことはできないのかと言われます。その理由というのは海兵隊が行う任務にあります。海兵隊の部隊というものは、戦闘部隊、輸送部隊など任務毎に分かれているわけではありません。全ての部隊が兵士、そしてヘリコプター、また食料を供給するもの、また輸送に携わるもの、電子関係の専門家、また情報収集の専門家など全てが一体になって部隊を形成しています。この一体となったチームは、何か有事が発生した際には、本当に数時間という間で迅速に部隊を展開します。何日もかかって何週間もかかったりするのではなく、本当に事が起こった瞬間にすべて動くことができます。なので、他の軍種は散らばって存在することはあるのですけれども、海兵隊は1つのグループとして一体として存在していたり、一旦何か起こったときに直ぐに対応できるようになっています。

沖縄の位置をご覧くださいますように、尖閣で何か起こっても、日本で何か起こっても、また朝鮮半島で何か起こっても、2、3時間で到達できる距離にあります。これがグアムに移ってしまったとしましたら、アメリカは日本を守るという責任、約束を果たせなくなってしまうのです。ですので、この大きな部隊を動かすということも不可能になってしまいます。

こちらは在日米軍再編の概観なのですけれども、米軍のプレゼンスを減らして、沖縄やその他の地域の皆様への負担をなるべく減らそうという取り組みです。

いくつか取り上げますと、海兵隊のグアムへの移転。そして、厚木から岩国へ空母艦載機部隊を移転させて厚木の一部返還を行います。その他のいくつかの地域で基地の統合を図り、基地の面積を減らすことで地元の皆さんへ土地を返還するという取り組みがあります。

在日米軍についてご説明してまいりましたが、なぜ彼らが日本に必要なのかということについてご説明いたします。

こちらは日米同盟に対する過去の脅威を示しています。冷戦は約50年間続きましたが、その間日米同盟にとっての脅威はソ連でした。日米双方が懸念していたのはソ連が北海道に侵入するのではないかということです。

これは過去の脅威です。

こちらは新たな脅威です。

北朝鮮なのですけれども、皆さん昨日今日と最新のニュースをお聞きになっているかと思いますが、また北朝鮮は、アメリカや日本に対してミサイルを発射すると、また核実験を行うといったことを話しています。BMD、弾道ミサイル防衛の協力というものは、日米の間の防衛協力の中で最も重要なものと言えます。

そして中国があります。

中国は、アメリカにとっても、日本にとっても、重要な貿易相手国です。一般的に申し上げますと世界でも重要な国です。日本とアメリカは、中国が経済成長を遂げることを望んでおりますし、台頭していくことを希望しておりますけれども、それは地域の平和と安定に資するような、責任のある良いパートナーとして成長することを望んでいます。

しかし一方で、ワシントンと東京双方とも非常に心配していることがあります。

こちらは中国の国防予算を示しております。2008年の数字でちょっと古いのですがけれども、黄色のラインは中国が公表している数字です。青いラインはアメリカなどその他の国が、実際に中国が使っているであろう予算の値、他の国が見積もっている額です。2012年にはこのグラフを大きく超えて2000億ドル近くになると考えています。

アメリカが懸念しておりますのは、中国の政治、中国の軍事に関する透明性の欠如です。また、中国は最近、船や飛行機を飛ばしてきて、日本の海上保安庁を押し出すような行為をして、島を乗っ取ろうといったような挑発行為をしております。約1年ほど前にフィリピンの南沙諸島にも中国がやってきて島を奪い取ろうとしました。フィリピンと日本の違いといたしまして、まず第一に日本の方がフィリピンより強いということです。そして第二に日本はアメリカの条約の同盟国であるということです。

在日米軍から少し離れまして、この地域の皆さんに大きな影響を与えました、2011年に起こりました地震、津波の際に行われたトモダチ作戦についてお話したいと思えます。

復興に際しましては、自衛隊が主な役割を果たして救援活動をされたと思うのですがけれども、アメリカも小さい役割ではありましたがけれども、日本の皆様の助けになれるよう貢献することができたということで誇りに思っております。

こちらにトモダチ作戦に従事した米軍の数が示されております。約2万人です。

先ほど兵力構成のお話をした際に、全ての兵士の在日米軍の数は約5万人というお話をいたしました。ですので、トモダチ作戦には在日米軍のおよそ50%が従事したということになります。航空機は200機近く、そして艦船は24隻が参加しました。食料はおよそ250トン、水は非常に重要ですがけれども800万ガロンが供給されました。そして、この数字が非常に大きくてびっくりするのですがけれども、その他支援物資約3万1千トンが空輸されました。

こちらは私も気に入っている写真なのですがけれども、オバマ大統領が在米日本大使館を震災が起こってから初めて訪問し、弔問記帳をしているところです。そして、この時にオバマ大統領は、アメリカが日本に対してできる限りの支援を行う決意を強調しました。

こちらの地図は、トモダチオペレーションの活動がどのように行われたかを示して



おります。病人を運んだりですとか、救援活動に参加する要員を送ったりですとか、こちらの自衛隊の輸送にも関与いたしました。

仙台駐屯地は陸上自衛隊の司令部がおかれておりまして、こちらに米軍も駆け付けまして、自衛隊の皆さんとともに復興活動に取り組みました。

こちらには示されていないのですが、私が記憶している限りでは最初の米軍部隊は震災が発生してから6時間で前方展開してきたと承知しております。

キャンプ座間からヘリコプターが送られまして、現地調査をするための人々が乗せられていたのですが、まず最初に着いた要員が送られて、家の中に閉じ込められている人ですとか、助けが必要な人達の様子を写真で撮って、救援活動が開始できるように現地調査を行いました。

こちらは空母のロナルドレーガンです。非常に大きな艦船です。そしてまた、強襲揚陸艦エセックスも大きな艦船です。これらの艦船はアフガニスタン、ペルシャ湾の方面に動いていたのですが、震災発生の一報を聞いて日本に向かって、普段は日本に関連する業務はしないのですが、震災の一報を受けて日本の中で非常に大きな役割を果たしました。

仙台空港の復旧は最も重要な任務と考えられました。この主要な空港が復旧しなければ、何百という航空機が救援物資を運んでくることができませんので、非常に重要なミッションでした。しかし、あまりにもひどい被害だったので、始めは仙台空港の復旧は直ぐにはできないだろうというふうに考えられていました。米軍と自衛隊が協力して取り組んだことで、4月には救援物資を運べる状態になりました。これは自衛隊、米軍の取り組みの最も成功した例の1つだと思います。

こちらはルース駐日大使です。ルース大使は避難所を訪れました。また、この後も何回も機会を見つけて被災地を訪れております。クリントン元国務長官も何回も日本を訪れまして、日本のトップのリーダー達と会談を行いました。

非常に甚大な被害が発生した大震災でしたが、トモダチ作戦の中で1つポジティブな結果があると思います。それは、日米の間の友好関係、そして協力関係を確認できたということです。非常に多くの命が失われた悲惨な出来事でしたが、唯一その協力関係を確認できたということはポジティブなことだったと思います。

そしてこの友好の精神がずっと続いていくことを希望しております。トモダチ作戦の新たな形としてこれからご紹介いたします。

こちらは軍事的なオペレーションではないのですが、トモダチ作戦の後にルース大使が立ち上げたトモダチイニシアチブです。トモダチイニシアチブはいくつかの要素があるのですが、主な焦点となっているのが教育面です。このトモダチイニシアチブは、日本の中学生、高校生、大学生が外国の主にアメリカへ留学することを支援するもので、その留学期間も短いものから長いものまで様々あります。この

取り組みは日本全国の学生を対象にしておりますけれども、特に皆様方がいらっしゃるこの地域に焦点を当てている取り組みです。

ルース大使は間もなく日本を離れて大使の職から離れ、新しい大使を迎えることとなりますが、ルース大使は大使をやめた後も引き続きこのトモダチイニシアチブを引っ張っていくこととなります。ルース大使が日本を離れることでこのイニシアチブは消えるということではなく、今後成長していけたらと思っております。

伊藤町長を始めといたしまして、その他の町長、村長さん達にも昨日お話したのですけれども、このイニシアチブについて特別な情報というものを共有させていただきました。

以上がトモダチ作戦と、そして、引き続きその精神を引き継いで行っていきたいトモダチイニシアチブです。

そして、本日このような中でお話できる機会をいただいたことに最後に感謝申し上げます。

皆様にとって興味のあるお話であったと思っております。

そして、このすてきな場所に来られたことが本当に良かったと思っております。

以上です。

(司会)

ありがとうございました。

本日は時間の関係上、講演に対するご質問の時間は設けておりませんので、ご意見等ございましたら、ご来場の際にお渡しいたしましたアンケート用紙に記入いただければ、講師の方にお伝えいたしますので、よろしく申し上げます。

本日は、ご静聴ありがとうございました。

本セミナーを通じまして、皆様が防衛省・自衛隊の活動につきまして、より一層のご理解を深めていただくことができるならば幸いです。

今後とも、防衛省・自衛隊に対するご理解・ご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。

なお、ご入場の際にお渡しいたしましたアンケート用紙につきましては、お帰りの際、アンケート回収箱に投函いただけますようお願いいたします。

皆様からいただきましたアンケートのご意見等につきましては、持ち帰りまして、私どもの今後の業務を実施するに当たっての参考とさせていただきます。

これもちまして、本日のセミナーを終わらせていただきます。

ありがとうございました。